

現代日韓両言語における「観察視点の状態表現」に関する研究 ―かたりの時間的構成を中心に―

LEE GYEONGMIN

本研究は、テキストの時間的構成に関する研究の中で、特に日本語と韓国語の「観察視点の状態表現」を中心に考察したい。工藤 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト―現代日本語の時間の表現―』は、テキストの中で果たすアスペクトの機能というのは、複数の出来事間の時間関係である<タクシス>を表し分けることであると指摘している。また、同時タクシス「継続相」の場合には、登場人物の知覚体験性=内的視点性の明示の有無で、「完成相」と「継続相」が対立する場合も起こってくると述べている。

本研究は、特に「観察視点の状態表現」において、日本語と韓国語の間で、異なる現象が見られることから、各母語話者のアンケート調査を通して、日韓両言語「観察視点の状態表現」の違いをより明らかにすることを目的とする。

研究方法は次のようである。日韓対訳本を例に、両言語の時制選択要因と「観察視点の状態表現」がテキストの中でどのような意味を持って機能するのかを、各母語話者を対象とするアンケート調査によって検討する。

①日韓対訳本の語りのテキストでの、「観察視点の状態表現」の用例比較

②日韓両言語母語話者に対する「観察視点の状態表現」に関するアンケート調査

調査の結果、日本語では、「観察視点の状態表現」を表す場合、「シテイル形」が用いられる傾向が多かったが、「シテイタ形」と組み合わせながら両方頻繁に現れた。韓国語では、「シテイタ形(～hai' iss-eoss-da)」が用いられる傾向が強い。日韓対訳本を材料に、韓国語を対照させながら、日本語の「時の表現」のテキスト的分析を進める。